社会変容のなかでの子供の社会化

——中国・上海の事例——

滝口直子

社会変容にしろ、社会化にしろ、それ自体広範囲の問題を提起する、大きな研究課題である。本稿では、紙数や資料の制限もあり、社会変容と子供の社会化に関して、包括的な研究や理論を提示することは差し控えたい。そこで筆者が一九八九年以降、上海で収集した資料を基に、現在の中国都市部やその近郊での社会変容と、そのなかで生じている子育てやしつけの特徴の把握に、焦点を置きたい。

社会的背景

現在の中国社会の特徴を、新伝統的政治体制と捉えることができよう（Walder, 1986）。伝統的体制の特徴としては、法律よりもむしろ模範の重視ということがあげられる。知識人の間でも法律や憲法に関する関心は低く、刑事犯の裁判でも自白に重きが置かれるという。また一九八九年の天安門事件以降の、「雷鋒同志に学べ」[1]とか、「江沢民同志の講話を学習しよう」といったキャンペーンや模範労働者の称賛などが示すように、モデルを真似ることが強調されている。その最良のモデルは、党最高幹部のはずである。

建前としては強力な中央集権管理体制であり、党の組織が中央から各村や各職場（単位）の隅々まで、網の目のように張りめぐらされている。各職場ごとに党の委員会が組織され、各部門にはその小組がある。人々の生活に最も密着した最下部組織として、農村には生産隊が、区部には居民委員会があり、そこにも政治や思想の担当者がいる。

しかし伝統的に中央と一般庶民との間にさまざまなクッ

ションや壁（伝統社会での紳士層、現在では地方官僚）が存在し、そういった中間層が時には国家利益のため、時には庶民のため、そしてある時には自己利益のために、中央の指示を無視したり、歪曲したり、濫用したりして、重要な介在的役割を果たしてきた。そして北京から遠く離れると、中央の威光は届きにくくなる。すなわち、

> 地方の事柄は……中央の権威にほとんど干渉を受けはしなかった。法的には上から下への一つの通路があるだけである。実際には、政府の役人のような仲介を使うことにより……理不尽な命令は突き返された。
> (Fei 1953：83-84, Shue 1988：95 のなかに引用)。

こういった社会構造を Shue (1988) は「蜜蜂の巣構造」と呼んでいる。

> 地方の役人や幹部たちは、一方では蜜蜂の巣の構造の環境に、他方では中央から発する特定の政策や政治的レトリックに対応しつつ、自分たちの地元を侵略的中央の要求から守るため、さらには自分たち自身の行政の力やシステムのなかでの操作の余地を高めるため、いろいろなわざや戦略を工夫してきた。(Shue 1988：130)

では現在の中国社会で、建前としての管理体制がどのように人々を拘束しているのか、それがどのように弱体化し、変容しつつあるのかをみていきたい。

管理体制

建前上は人生の全ての段階で、健康、発達、思想の健全さ、娯楽、性など全てを管理されていると言っても過言ではない。在学中は学校により（小学校でも朝七時くらいから夕方四時すぎまでは学校にいる）、職に就くと職場により管理される。そして居住地域では居民委員会や生産隊の管理下にある。もっともその管理力は最近、はなはだしく弱まっている。そして一生、生れ付きのものである戸籍の力の影響下に置かれるのである。ここでは国家と市民社会との融合が生じているようであり、この管理・保障体制を Yang (1988) は、文化と社会の政治化と呼んでいる。

戸籍（戸口）

農村戸籍と都市戸籍があり、母親の戸籍が子供の戸籍となる。都市の戸籍の方が、進学や就職、結婚や年金や医療保障など、人生の選択肢に影響を与える全てにおいて、絶対的に有利である。戸籍を変更することは可能ではあるが、北京や上海や広州といった経済的に発達した都市の戸籍を手に入れるのは、非常に難しい。

戸籍のもつ力について、上海市に住みながら、仮の戸籍

しかもたない家族の例を通してみてみたい。上海のある地区には、東北や四川などから移ってきた冶金部所属の家族が集まって居住している。彼（女）らは農村から出稼ぎに来た人々とは違い、国家の要請によりやって来た人々である。例えば、二〇冶金部勤務の家族は東北出身が多く、二〇冶金部の本部がおかれた河北の戸籍を持ち、上海では仮の戸籍でもって生活を送っている。子供が上海で生まれたとしても、その子供の戸籍はやはり河北となる。河北の戸籍を持った冶金部の子供が、例えば学業優秀で、受験戦争を勝ち抜いて、大学に進学したとする。彼（女）は就職においてかなり選択の余地が出てくるだろう。それでも自宅からの通勤がほとんど不可能という理由で（冶金部の多くは、市の中心部からバスで一時間以上かかる郊外に住んでいる）、上海市内の（高収入の）外資系企業には就職できないだろう。

大学進学率の低さから考え、[2] 冶金部の大多数の子供たちは進学しないと考えてよい。となると就職の選択の幅は、かなり狭められる。まず最初の関門は、小学校を卒業して、中学（初中）への進学である。ごく最近まで中学は最難関である市の重点中学、その次に区の市の重点中学、そして区の重点中学、一般の中学に分かれていた。冶金部の多く住む地域には区の市の重点中学がないために、子供たちは最難関をねらうか、区の重点あるいは一般中学に行くしかなかった。ところが最近、市教育局は中学の入試を事実上廃止し、子供たちは近くの中学に通うことになった。この地域には有名中学は少ないので、優秀な子供にとっても、進学率の高い高中（高校）進学にかなり不利になった。

中学の次の段階は、就職か進学かである。進学先としては高中、幼稚園や小学校教諭を養成する師範学校、中等専門学校などがある。有名高中に入れない場合は、大学進学は困難となるので、たいていは専門学校や技術学校に行く。しかし入りたい専門学校や技術学校に寮がないとか、学校が区や工場や企業によって設立された場合は、入学を区の住民やその工場に勤務する家族に制限していることなどがあり、市のはずれに住み、上海戸籍を持たない冶金部の子供たちには、入学が難しい。容易に入れるのは冶金部の学校であり、そこを卒業すると冶金部に勤めるようになる。しかし冶金部は転勤が多いうえに、仕事が重労働であるため、子供を冶金部には入れたくないと思う親が多い。

単位（職場）での管理

中学や高校卒業の後就職を希望する者は、町の弁公室で職を紹介してもらうとか、身内の紹介とかで就職する。専

門学校や技術学校、大学や大専（短大）を卒業した者は、基本的には上部組織が計画的に分配するが、就職に関係（グワンシ）がものをいうことも多い。外資系企業に勤務を希望する者は自ら応募するが、外資系企業は寮を持っていないことが多いため、たいてい市内の戸籍（バスや自転車で通える範囲）であることが条件となる。いったん就職すると（外資系を除き）、職場へ全面的に、組織的に依存した生活を送らざるをえなくなる。

まず住居である。上海の住宅問題は深刻であり区部の一人あたりの居住面積は六、三m^2である。[3] 部屋の確保を単位に頼らざるをえない。マンションを買うこともできるようになったが、非常に高く、しかも将来政治不安が生じた時の保障がないため、一般の人はほとんど購入しない（ただしマンションの売れ行きはよい）。医療や年金も職場を通して保障される。引越しの車の手配や、入院時のベッドの確保、汽車や飛行機のチケット購入も、職場を通して依頼すると、スムーズにいく。また衣料や食物の一括購入、レクレーションや旅行、離婚の仲裁まで職場に依存することが多く、一人っ子政策により避妊や出産までも、職場によって管理されている。プライバシーは存在しがたいといえよう。

子供の社会化との関連で、こういった管理体制に呼応するのが、上位者の権威の尊重とそれへの服従とか、集団への同調や忠誠、対人関係での葛藤や対立の回避といった価値観や人間関係の特徴である。上位者と集団の原型が、それぞれ両親（ことに父親）と（核）家族であろう。いつの時代にも為政者（や中央政府）は、この価値観の対象が、家族をこえた集団、ことに共産主義体制のもとでは全人民にまで拡大されることを願い、人々の教化に努めてきた。残念ながら、親族の境界の内では強い同調や忠誠心も、その外にまでは及びがたく、その試みはいつの世も、あまり成功したとは言いがたいようである（Hsu 1971, Lau 1981など）。

管理体制の弱体化

七八年以降の対外開放政策は、まさに壁に穴をあけたのであり、時には歪曲されているとはいえ、いろいろな形（ラジオのニュース、テレビドラマ、映画、海外の親戚からの便りなど）で外国の情報が入ってくる。また外資系企業の進出により都会に住む人々は、「豪奢」な外国人の暮らしぶりを目のあたりにすることになった。国内では、市場経済や外資導入、経済特区の設立などにより、流通や通信や交通がめざましい発達を遂げ、「蜜蜂の巣」（地域）の壁

を越えた、流動性のあるネットワークを作りあげることが可能となった。党の指導力の低下と管理体制の弱体化、さらに個人営業や外資系企業といった選択肢の出現にともなって、従来の社会主義システムの外での（時にはシステムに寄生した）繁栄が生じている。

現在繁栄ぶりが顕著である事象や人々は、高級幹部、経済特区、個体戸と呼ばれる個人営業者、闇での外国タバコの販売や通貨交換、海外に親戚のいる人々、権限がいろいろとあり製品を交換したり横流ししたりできる人々などであり、主に従来のシステムの外での現象である。公私混同や腐敗の広がりは、マス・メディアが指摘するごとくであり、システムの外に完全に出てしまいたいという願望は、出国熱へとつながっていくのかもしれない。

こういった社会問題は、管理体制の弱体化により露わとなったが、その発現には、構造そのものも関連しているようだ。Walder（1986）の指摘するように、被雇用者は全面的に職場に依存した生活を送っている。物やサービスが不十分な状況で、現場や末端の幹部が昇進や配置がえや住居や生活の便宜さの提供にかなりの権限を持っており、それを忠誠の報酬として使ったりすると、パトロン―クライエントの関係や、功利性に基づいた個人的・手段的な関係が発達してくる。こういった関係は、ちょっとした好意の範囲に留まることもあるが、腐敗にいたることもある。権力に対するチェックのききにくい体制では、自主性や自発性、それに伴う責任感や公共の精神といったものが育ちにくいし、市民意識も希薄化する傾向にある。

さらに自主的な横のつながりのある組織（自主的な組合や政党、青年会や自治組織など）作りを、中央権力を威嚇するものとして、中央が阻害してきたために、網の目の管理体制が弱くなると、そこに残されたのは、個々人である。この個人は、ばらばらの（あるいは家族を中心にまとまった）個々人であり、すなわち、「関係あれど組織なし」とか言われる現象の背景となるものであろう。

このようななかで顕著となるのが、中国人の価値観や人間関係のもう一つの側面である。それは特定の個人間の関係の柔軟性や功利性、自己の利益を追求、拡大するために機会にうまく乗ずる積極性、現状にうまくあわせる適応性である（King & Bond 1985 など）。この二つの側面は矛盾したものではない。同調や服従は、単に表面的なその場の状況に合わせたもの、社会的調和を維持するための儀礼的機能、パーフォーマンスであってもよいわけだし（King & Bond 1985 など）、Fei（1967）の指摘するように、家族という概

念自体が、その時の状況により核家族からリネッジやクランまでを含む柔軟性を持っており、個人はその曖昧さを操作し、自己に有利な関係の網の目を構築していくのである。

また具体的な、状況的な関係の外では、儒教的な規範や道徳観は関連性を失い、中国人は自己中心的な行場を取るとも言われている（King & Bond 1985）。ボランティア組織への加入率の低さ（Lau 1981）とか、ゴミの投げ捨てとか、込みあったバスに乗る際の席とりのすさまじさなどが、それを表しているかもしれない。

ではここで個人の利益保護主義（利己主義）や、人民と中央とのクッションとしての末端幹部の役割、また狭い地域の壁を越えた流動性を表す現象を、数例あげてみたい。

個人の利益保護主義

農村では高い壁で囲まれた家が多い。都市部のアパートの場合もアパート群を取り囲む高い塀や鉄格子の門が特徴的である。塀の上にガラスの破片を並べているのもよく見かける。泥棒よけのいわば鉄条網である。門には大きな鍵がかかっている。近郊農村では高い塀と門と鍵に保護された畑さえある。トマト一つといえど貴重な財なのであろう。

農村には集会所のような建物が村の真ん中にある。塀で周囲を囲み、前庭はコンクリートで固めている。鍵を管理するのは生産隊長であり、隊長が使っていない時には鍵がかけられたままである。その場所を遊び場として子供たちに開放するとか、そこで隊長以外の者が集会を催すといった発想はないようである。日本の村の公民館が、村人の喜寿の祝いや青年会や婦人会の集まりなどに使われるのとは、おもむきを異にしている。

耕作に携わる一〇人の農民がいる。耕地は作物別に分けられている。例えば青菜を作る場合、その区画を一〇に分ける。しかし場所により多少は良い悪いの差が出てくる。文句やトラブルが生じないように、土地の割り当てはくじで決める。種の分配もくじである。はては野菜を出荷する時にかごに入れて重さを測るのだが、どのかごを使うかも、その都度くじで決定する。芹の苗を苗床から畑に移す時にも苗床を一〇等分し、くじで誰がどの苗を取るかを決める。自分の苗を一本取ったと言って、隣で苗を移していた人に摑みかかった女性がいた。

末端幹部の役割や地域を越えた流動性について

農村では自留地に家を建てることができる。ある村では、自留地のない人にも生産隊長は家を建てることを許していた。また戸籍を持っていない出稼ぎの家族の子供が村の小学校に、地元の人と同じく学費を払わず通うことも許した。

隊長と折り合いが悪いと、仕事の世話をしてもらえないという。賭事などであまり評判の良くない青年であるが、この青年は学校を卒業しても隊長のところに挨拶に行かなかったため、隊長も彼を隊の一員であるとは認めていない。この青年はアルバイトで生活している。また家事や農作業は充分出来るものの、軽度の知的障害のある若い女性がいるが、隊長は彼女に仕事を与えない。その父親は自己主張の強い性格で、隊長とうまくいっていないからだと、人は言う。

師範学校を卒業した小学校教師の大半は、一生を小学校勤務で終わる。校長になればよい方である。現在の上海で、経済的に恵まれない教師の職を嫌って、離職したり、出国したりする人もいる。しかしなかには、教師から区教育局へ、区教育局から市教育局へと「出世コース」を歩む人もでてくる。有能かつ雄弁な人物であるが、また身内に外国の大学からしばしば招請を受ける、高名な教授がいる。

上海の家庭を訪れていつも不思議に思うのは、なぜこんなに高価な電気製品が買えるのだろうか、なぜこんなに高い日本製のビデオとかオートバイとかがあるのだろうか、なぜピアノとかクーラーまであるのだろうか、といった一見収入にそぐわない物資の豊富さである。外国に親戚がいたり、出国する機会の多い親戚がいる家庭の場合は、さして不思議でもない。そうでない家庭は、どうやって入手するのであろうか。この問いを探っていくと、工場や商店に勤務している人たち同士の物資の交換とか、つてを頼って安く入手するとかの許容範囲におさまるものから、大規模な腐敗にいたる問題にたどりつく。全国規模の会議への出席は、関係作りや商談のよい機会であり、そういった機会をうまく利用できる人は、地域を越えたネットワークを自ら作り上げ、社会のヒエラルキーを登っていくことができる。

要領が特別よいとか、関係がたくさんあるとかいうわけではない一般の人々も、どうにか機会を見つけて、少しでも状況をよい方向に変えようとする。例えば、近郊農村では土地を、工場用地などとして国家に取られることが多いが、その代わり国の企業に職を得ることができ、さらに農村戸籍を市のものに変えることができる。農村企業で安定した満足度の高い職に就いていても将来性、特に子供の将来性を考えて、医療保障や教育や年金面で有利な国営企業に移るのを希望する人が多い。農村住民の多くが、村に住んでいても村政府の管轄に入らなくなると、村の末端幹部の影響力は弱体化するであろう。また人々のネットワーク

はますます、村という地域性を越えた、流動的なものとなるだろう。

現在の中国社会の安定剤としての関係の網の目

中国では、フィリピンや東欧におけるキリスト教のように、非政治的でありながら、国民を統合できる宗教の力は、限られている。人々を統合する力を持つものとして、スポーツがあげられる。オリンピックとかアジア大会といった大きなイヴェントの間は、全国民の愛国心を燃え立たせることができる。しかし建国後、左右の揺れの間で翻弄され、市場経済導入の後は、経済的な欲望を刺激されかつ、経済的な上昇の機会を見出した、現在の中国の人々にとって、あてになるのは「お金」なのではないだろうか。「万元戸」、「億元戸」といった経済的成功例は、高度成長期の日本における「三種の神器」とか「3C」のように、人々のエネルギーを経済面に結集させる、具体的かつ現実的象徴なのであろう。また、経済特区や外資系企業のようにシステムの外に黄金郷は投影されるのであるから、最も理想化されたモデルも、外国に投影されるのかもしれない。現在の中国社会では、個人が少しでも機会を見つけ、繁栄への努力を重ねていると言えよう。また個人を中心とした関係の網の目は、政治の縦割りの壁を越え柔軟に広がっていき、人々を結びつけ、また生活の向上をもたらすことで、現在の中国社会の安定剤となっているとも言えよう（Walder 1986）。

社会変容と子供の社会化

伝統的なしつけ

伝統的な価値観を背景とした子育ての慣習として、敵意や攻撃性といった人間関係を悪化させるおそれのある感情の抑制、家族への責任や集団的意識や権威への依存意識の育成などがあげられてきた（Wilson 1981, Wu & Tseng 1985）。台湾や中国の農村部で子育てを観察した研究者は、その特徴を次のようにまとめている。

生まれて最初の五、六年は物事がわからないと信じられており、周りの皆の愛情と注目を受ける時期である。泣きだすとすぐに誰かがあやし、離乳やトイレのしつけも緩やかである。およそ六歳に達すると物事を理解できるようになるとされ、父親は息子に威厳を持った厳しい態度を取るようになる。「お父さんに言いつけるよ」という嚇しは、子供の行動を変えるのに、大変効果がある。父親が叩く時には厳しいが冷静なお小言がついてくる。子供の出来がよくてもめったにうれしそうな顔を見せたりはしない。母親

は息子にとって愛情と感謝の源であり、もし母親が叩くことがあったとしても、それは毎日の生活のフラストレーションからの、衝動的な怒りである。娘は最終的には家を出ていくので、父親と娘の関係は気楽なリラックスしたものである。しかし母親には、他家に嫁して、嫁としてやっていけるように娘をしつける役目があり、子守とかお使いや家事のしつけなど、厳しくならざるをえない。子供のいたずらや悪さで父母がもっとも心配するのが、喧嘩と盗みであり、どちらも周囲と家族との人間関係を破綻させるもとである。祖父母になると子供のしつけという責任から解放され、愛情を遠慮なく注ぐことができるようになる。また祖母は子守や縫い物、洗濯をしてくれるありがたい存在でもある。(Parish & Whyte 1978, Tseng & Hsu 1969-70, Wolf 1970)。

では現在は、どのように子供たちはしつけられ、どういった行動の特徴を示すのであろうか。上海の近郊農村で収集した資料を基に、その特徴をまとめてみたい。

現在の子育てとしつけ

「一人っ子政策」の施行以来、上海市内や都市近郊はほとんど「一人っ子」である。男児でも女児でも一人っ子は小皇帝であり、大人の愛情と関心を一身に集め育っていく。とはいえ農村では、やはり男の子が好まれるようだ。一族に女の子ばかりが生まれると笑われる、と気にする人もいる。

誕生後、一二日目に親戚や近所の人を招いて大々的にお祝いをする。そして伝統に従って、赤く染めたゆで卵を皆に配る。生まれて一年間は、母親が仕事を休んで面倒をみることが多い。その次に多い世話人（care taker）は祖母である。大半の子供は生まれて一年間、昼間は母か祖母に面倒をみてもらっている。父親の育児への関与については、「家にいる時にはよく面倒をみる」、と肯定的に話す母親が多かった。実際筆者も夕方や休日に、父親が赤んぼを抱いてあやしている光景を、よく目にした。

父母や祖父母の一人っ子に対する態度は、次のフィールドノートからの抜き書きが、雄弁に物語る。

母親が一歳の女児を抱いている。その周りに父親と祖母もいる。筆者が「歯がもう生えてますね。丈夫そうですね」と言うと、祖母は「賢い、賢い。御飯は何でも食べる。将来は大学に入って有望な人に……賢い、賢い。この子は生まれて四日目でもう外を見たがった。部屋のなかは見たくない。」「おばさんと言ってごらん。将軍の格好をしてごらん」、と祖母は孫に言う。「踊ってごらん、肩を上げてごら

ん」、と祖母や父母が代わる代わる言う。子供、手を上げたりちょっと肩を上げたりする。「賢い、賢い、聞いて大人の言うことが分かる……。」

赤んぼの頃泣き出すと、真夜中でも忙しい時でもすぐ、親が抱いてあやした。親がどうしても手が離せない時には、家にいる大人が誰でもすぐ、抱きかかえてあやした、と答える親が圧倒的に多い。一人っ子なので、できるだけ子供の要求は満足させたいのである。

よちよち歩きから小学校入学まで

よちよち歩きの子供たちの大部分は、朝から夕方までを託児所で過ごす。早い場合は二ヵ月から、大半は二歳までに父親か母親の職場の託児所に、三、四歳になると職場や村の幼稚園に入る。

自分で食事をするとか服を着るといった基本的しつけは、父母の役目と思う親が過半数を占めるが、実情は、大半の親が託児所や幼稚園に入って先生から教えてもらった、と答えている。残りは子供が大人の真似をして自然に覚えたというものである。実際、幼稚園では教師がかなり細かく、基本的な生活習慣の指導を行っている。

この時期の子供たちは、主に家のなかか庭でブロックで列車や機関銃を組み立てたり、三輪車で庭を一周したりして遊ぶ。遊び相手は、同じ屋敷内に住むいとこである。夕方、独身の伯父や伯母や年上のいとこに連れられて外を散歩することもある。休日には、時には市内の公園に連れていってもらったりもする。

大部分の親は、二、三歳までに子供たちは大人の言うことを理解できるようになり、また幼稚園に入ると良いこと・悪いことの区別がつき、子供は子供なりの意志を持つようになると考えている。父母からの聞き取りによると叱るのは、うっかりして水路に落ちたなど危険なことをしたとか、御飯を食べないとか、部屋をちらかしたとか、物を壊したとかであり、言葉を用いることが多い。御飯を食べないと言って箸を捨てた、水路に落ちたなど程度がはなはだしい場合、また生命に直接危険が及ぶ時には、叩くこともある。褒めるのは御飯をよく食べた、幼稚園の先生から褒められたなどの場合で、これも言葉によることが多い。父母のどちらを子供は怖がるかという問いには、どちらも怖がっていないという答えが多かった。家族の言うことは聞かない小皇帝も、先生の指図には素直に従うようだ。この村の幼稚園、小学校ともに各学年一クラスずつの小規模校で、学校周辺の子供たちが通ってくる。

幼　稚　園

子供たちは朝八時から夕方四時くらいまでを幼稚園で過ごす。幼稚園は小、中、大の三班に分かれており、それぞれ三、四歳・五歳・六歳くらいの子供を対象とするが、年齢のわりに体の大きい子供は、上のクラスに入れられることもある。八時過ぎに先生が出席をとる。自分の名前が呼ばれると、託児所での経験のせいか、小班に入ったばかりの子供からでさえ、「到」という元気よい返事が返ってくる。九時から十時半までが授業である。それから昼食を食べて、三時くらいまでは昼寝をする。その後おやつを食べ、家族が迎えに来るまでの時間は外で遊んだり、室内でブロックを組み立てたりする自由活動である。調査当時、小班は二四人、中班は二二人、大班は三三人、各班の担当教師は二人であり、原則として昼寝を境に交替する。

小　班

小班の授業内容は童謡を覚えさせたり、あひるや兎の真似をさせたり、指で円を描かせ丸いものの名を挙げさせたりといった内容で、自由時間には歌を歌わせたり、ブロックを組み立てさせたり、庭のブランコやジムで遊ばせたりする。ただし遊びと授業の区別は流動的で、その場の状況により授業が遊びへと変っていく。

教師が褒めるのは、子供が言われたことをうまくやれた（うまく歌えた、など）時が多く、叱ったり、注意したりするのは、基本的な生活習慣に関することが多い（手で食べている子供に、手では汚いからだめよとか、イスにきちんと座りなさいなど）。

中　班

中班になると、授業と遊びの区別は明確になる。教師主導の流れであり、子供たちに対する態度も少し厳しくなる。授業は列を作り行進や体操をさせる、遊技やゲームをさせる、絵を見て子供たちにその絵について説明させる、物語を聞かせてそれについての質問に答えさせる、天気や曜日や数について学ばせるといった内容である。

教師が褒めるのは、子供が「よくできた」場合である。叱ったり、注意するのは、基本的生活習慣に加え、子供同士の喧嘩、ルールを守らない、自分の責任回避とかの場合も含まれる。

男児二人がアニメの変身物の戦闘シーンの真似、一人が本気で叩く、先生はその子の名前をフルネームで呼ぶ。その子は止める。

子供たちがやかんを置いているところでお湯を飲んでいると、先生、それぞれの碗をテーブルの上に移す。

室内で遊んでいる時、外に出ていった子供二人の名前を

呼ぶ、戻ってこないので「先生が名前を呼んでいるのに聞こえないの」、と先生が外に出て、連れ戻す。

挙手をせず発言した子供に注意する。

ハンカチ検査で、ある子供が、「おかあさんが忘れた。」先生、「ハンカチを持ってくるのはお母さん、それともあなた？　あなたは今学期いつもハンカチを忘れている。こういう状態が続くと、私はあなたが好きでなくなるよ。」

大　班

教師はかなり厳しくかつ権威的に振舞っていた。授業は、物語を聞いて内容を理解するだけでなく、暗唱する、簡単な算数を習う、小集団に分かれ、共同で積み木を使って一つのものを作り上げる、天気の日記をつける、病院や商店や託児所などのごっこ遊びをした後に、何をしたかを報告させる、国慶節や人民大会堂や国旗について学ぶといったものである。さらに昼食時には、当番がテーブルをふいて、スプーンや碗を配ったりする。

教師が注意したり叱ったりするのは、子供たちが言われたことをうまくやれなかったとかの状況も、加わってくる。（小集団に分かれ、積み木で、共同で一つのものを作っている。あるグループは城を作り上げたけれど、別のグループはバラバラで、完成できなかった）「今日は一体何を作ったの？　何もできなかった。こちらは積み木を集めて一つのものを作ったのでよい。あなたたちは最初は、自分たちの考えを持っていたのに、なぜ他の人たちを真似たの？」

小学校教育

この村の小学校では月曜日から金曜日までは六時間、土曜日は四時間の授業を行っている。五年間を通し国語と数学が、授業の中心であり、[4] このカリキュラムは、調査当時の中学入試の科目の比重（国語と数学と英語が1：1：½）を反映している。七八年以前の学校教育は、家族を越えた集団の団結や、国家への忠誠を特に強調していたが、家族の価値観と対立する形ではなく、勤勉さや規律の遵守、他人とのよい関係や、家での父母の手伝いなど、父母が賛同する価値観とともに、それらを教えていた（Parish & Whyte 1978）。

現在は、個人の学業の到達度を重視している。授業中に行われる小テストの点数は、教室の壁に貼りつけられた成績表に書きこまれる。六〇点未満の場合、赤字で書かれることもあるし、成績のよくない子供は、放課後補習を受けたりもする。さらに学期末試験に合格しなかった子供は、落第である。一度落ちても再試験を受けられるのだが、それでも各学年二、三の落第生がいる。また田舎から上海に移ってきた子供の場合、授業のレベルの違いから、年下の

学年に入る子供もいる。五年生のクラスには中学二、三年に相応する子供もいた。しかしこういった成績のよくない子供たちは、それ程強い劣等感を抱いているようにはみえない。農村の場合中卒で充分という考え方が強いし、最近は学業よりお金という風潮なので、子供たちはそれを敏感に感じとっているのかもしれない。

授業は権威を持った教師が、子供たちの集団に対し一斉に行う形をとり、授業の始まりと終わりは起立、礼、着席で区切られる。教師の権威が、当然のこととして受け入れられているので、子供たちは比較的従順である。授業中の私語やよそ見は、子供の名前を呼んだり、黒板に名前を書いたりする程度で、抑えられる。何度も宿題を忘れたり、私語やよそ見をした子供は、教室の後ろや前に立たされたり、職員室に呼びつけられたりする。子供たちや親は一般に、「先生の言うことは聞くものだ」と思っているため、強権で管理する必要はなさそうだ。

教師の権威の代理となるのが、教師が任命する小幹部たちである。教師は成績のよい子供を級長や各種委員に任ずる。これら小幹部は教師の権威の一端を担って黒板にキャンペーンを書いたり、爪やハンカチや髪の毛の検査をしたり、練習帳を配ったり、テストを集めたり、さらには高学年の小幹部が、入学したての一年生に体操を教えたりもする。この小幹部たちは時には教師より厳しく、同級生を評価したり、注意を与えたりする。

教師の権威に対し、全く反抗がないかというと、そうでもない。高学年になると、音楽や自然常識のような入試と関係ない科目で、子供たちは適宜息抜きをしている。ある低学年の数学教師が四年生に音楽を教えていたが、子供たちはあまり教師に注意を払わなかった。その教師が、「あなたたちはこうしていてはだめですよ。先生を尊敬しないのですか。今は尊師週ですよ……」と言ったところ、小声で「今は敬老週」と言った子供がいた。

児童の家庭でのしつけ

一人っ子は小皇帝などと呼ばれ、両親の過保護や過大期待が問題となっている。この農村では、英語やピアノやバイオリンなどを習っている子供は、ほとんどいなかった。また市内の小学校で行っているような、国語や数学や英語の上級クラスや書道、絵画の芸術教室も、今のところは開かれていない。学校で勉強をして、帰宅後夕食時くらいまで遊び、夜は早めに就寝、休日には時々市内に連れていってもらう。夏休みにはトランプやめんこ、モノポリーなどのゲーム、かくれんぼやゴム跳びをして遊んだり、テレビ

を見たりといった幸せな子供像が、一般的である。

時々野菜を洗ったり、鶏に餌をやったりすることはあっても、子供たちが日常的に手伝いをする姿は、あまり見かけなかった。この村では小学生以下とそれ以上の人口比は一対五であり、充分大人がいるので、子供の手伝いを実際必要としないようだ。また「子供が自分でできることでも、親が助ける」という親も、半数近くいた。

大半の親は子供が皆と一緒に遊ぶことを望むが、いたずらっ子、いじめっ子とは遊ばせたくないと思っている。喧嘩の時は自分の子を叱ると答えた親がほとんどであるが、実際場面でも、自分の子を叱っていた。他人の子を叱るといった、他家との関係を悪化させるようなことはしないようだ。感情の自由な表出も、時として対人関係をこじれさすことがある。しかし過半数の父母は、子供は自由に感情を表してよいと考えている。

親にとって良い子とは勉強をよくし、親や先生の言うことをよく聞く、礼儀正しい子である。子供にリーダーになってほしいと思う親も多く、将来有能な人材になってほしい、全面的に発展してほしい、大学に入って技術を身につけてほしいと望む反面、親の学歴が低い（文化大革命のため）ので、高望みはしない、子供の能力と意志による、自然に成長してほしいと言う親も、半分近くいる。

子供がしてはいけないことは、いじめ、いたずら、うそ、喧嘩、盗み、大人のテレビ番組を見ることなどであり、幼稚園児の親は、水辺で遊ぶ、はさみやナイフで遊ぶ、遠くまで一人で行くといった危険なことを、主にあげた。親が叱る時は宿題をしない、成績が悪い、物を壊したり部屋をめちゃくちゃにした、などである。農村では賭け事がさかんと言われているが、高学年の親のなかには、してはいけないこととして、酒やマージャンをあげ、また賭け事をした時に、叩いて叱ったと言った人もいた。褒めるのは、成績がよい、先生に褒められた、手伝いをした、ごはんをよく食べたなどの状況である。叱り方、褒め方とも、口頭によるものが多いが、時には叩いたり、また文房具やおもちゃなどを買ってやることもある。

子供の行動の特徴

子供同士（だいたい同年令）では、ふざけて取っ組み合いをするとかの社交・攻撃的（socially aggressive）な行動、大人（主に父母）に対してはンマ、ンマとかパパ、パパと何度も呼んで自分に注意をひいたり、遠くの皿から料理を取ってもらったりする自己中心的、また依存的な行動が、顕著であった。

一人の子供が後ろから別の子を、ロボットのように「操作」、一組でロボットの闘いのようなことをさせる（小学校高学年の男子）

ブロックで鉄砲を作って、テレビの変身物の戦闘シーンの真似（幼稚園から小学校高学年までを通じて、男児の間でよくみられる）

子供がンマ、ンマと（だんだんかん高い声で）母を呼ぶ。（母親は二階にいるので返事をしない。）一〇回くらい呼んだ。（小学三年）

子供が豆腐を箸で指してパパ、パパ。「自分で取りなさい」と言いつつも、母が取る。

また他の子供になすべきことを指示する向社会的（pro-social）な行動は、小幹部に多くみられた。年上の子供が年下の子供に、掃除とか子守とかの際、注意を与えるとかの年令ではなく、小幹部という社会的役割と向社会的な行動が、結びついている。またいろいろな年令の子供が交って、年上の子供のリーダーシップのもとに遊ぶという光景は、あまり見かけなかった。

社会変容のなかでの子供たち

親や教師の言うことをよくきくのが良い子とか、喧嘩の時は自分の子供を叱るとかの点で、権威への服従や人間関係を破綻させるような攻撃性の抑制といった伝統的価値観が、しつけにみられる。しかし感情の自由な表出の許容とか、学業での競争や達成の強調に、今日の社会変容に相応した変化が見出される。現在の社会状況、ことに都市部では、核家族を中心とした生活で、企業家精神にとんだ個人が、変動の機会をうまく掴み、網の目の人間関係を地域性を越えて広げ、自己利益を追求している。幼稚園や小学校教育での競争や達成の奨励は、それにみあったものと言えよう。親の権威がうすれたなか、教師の権威は比較的よく保たれている、とはいえその権威の弱体化の兆候は、農村部でさえみられる（例、音楽の授業）。

一人っ子は「小皇帝」などと呼ばれ、偏食が多く我儘か（許　一九八五、張・丁一九八九）、甘やかされすぎとか、満点を取らないと罰せられるとかで、親の過剰期待の犠牲になるといった、否定的な面が、よく報道される（莫　一九九二）。しかし上海の一人っ子は、子供の数の少ないことの有利な面も、我々に見せてくれる。叩いたり殴ったりといった体罰を用いる父母は、あまり見られない。子供たちは、社交・攻撃的で、活発である。本稿の資料には含まれていないが、上海区部の子供たちは、さらに好奇心旺盛で、も

のおじせず、自己表現するのが好きであり、書や絵やスポーツ、音楽などの才能をのばす機会にも恵まれている。

ただし、自己中心的で、依存的な面がみられ、小さい頃からいろいろな年令の子供たちと交わって遊ぶという経験も、少ない。このことが、芸術とまで言われる「関係」の網の目を構築する能力に、どう影響していくかは、将来気になるところである。

註

① 雷鋒とは、一九六〇年代に、革命的犠牲者のモデルとして大々的に称賛された人物。

② 中国教育統計年鑑によると、一九八七年の全国平均の大学進学率は、三％程度。

③ 一九八九年の上海市統計年鑑による。

④ 調査当時（八九年）、この村では小学校の教室の不足から、六年生になると、中学校で六年目のカリキュラムを履修することになっていた。現在、中学校の入試はほとんど廃止されている。

謝　辞

本稿は、おもに八九年、上海郊外の農村で行なった調査に基づく資料を分析したものである。調査にあたって区や郷政府、復旦大学、小学校、幼稚園およびいろいろな関係の方々、また調査地でのインフォーマントの方々の協力と援助を頂いた。あつく御礼申し上げたい。さらに筆者の前任校である別府大学および私学財団の経済的援助にも、心から感謝の意を表したい。

参考文献

英　文

Fei Xiao-Tung（費孝通）
1953 *China's Gentry*. University of Chicago Press: Chicago.
Shue (1988) のなかに引用

1967 *Hsiang-tu Chung-kuo*. Lu-Chou Ch'u-Pan She: Taipei.
King and Bond (1985) のなかに引用

Hsu, Francis L. K.
1971 Filial Piety in Japan and China: Borrowing, Variation and Significance. *Journal of Comparative Family Studies* (Spring), pp. 67-74.

King, Ambrose Y. C., and Michael H. Bond
1985 The Confucian Paradigm of Man: a Sociological View. In *Chinese Culture and Mental Health*, ed. Tseng, Wen-Shing and David Y. H. Wu. Academic Press: Orlando, pp. 29-46.

Lau, Siu-Kai
1981 Chinese Familism in an Urban-Industrial Setting: the Case of Hong Kong. *Journal of Marriage and the Family*, (November), pp. 977-992.

Parish, William L., and Martin Whyte

1978 *Village and Family in Contemporary China*. The University of Chicago Press: Chicago

Shue, Vivienne

1988 *The Reach of the State*. Stanford University Press: Stanford.

Tseng, Wen-Shing, and Jing Hsu

1969-70 Chinese Culture, Personality Formation and Mental Illness. *International Journal of Social Psychiatry*, Vol. 16, pp. 5-14.

Walder, Andrew G.

1986 *Communist Neo-Traditionalism*. University of California Press; Berkeley and Los Angeles.

Wilson, Richard W.

1981 Conformity and Deviance Regarding Moral Rules in Chinese Society: a Socialization Perspective. In *Normal and Abnormal Behavior in Chinese Culture*, ed. Kleinman, Arthur and Tsung-Yi Lin. D. Reidel Publishing Co.: Boston

Wolf, Margery

1970 Child Training and the Chinese Family. In *Family and Kinship in Chinese Society*, ed. Freedman, Maurice. Stanford University Press: Stanford, pp. 37-62.

Wu, David Y., and Wen-Shing Tseng

1985 Introduction: the Characteristics of Chinese Culture. In Tseng and Wu (1985), pp. 3-14

Yang, Mayfair Mei-hui

1988 The Modernity of Power in the Chinese Socialist Order. *Cultural Anthropology*, Vol. 3(4), pp. 408-427.

中　文

許積德

一九八五「目前上海人口素質的初步探討」『人口信息』pp. 35-37

上海市統計局

一九八九『上海統計年鑑』

張蘭根・丁建忠

一九八九「独生子女動倹教育点滴」『上海教育』p. 43

国家教育委員会計画財務局（編）

一九八七『中国教育統計年鑑』

和　文

莫邦富

一九九二『独生子女』河出書房新社

（本学助教授　社会学）